

(4) 定点把握対象五類感染症の概況

ア 患者定点について(表-3/p.35、京都市感染症発生動向調査事業指定届出機関(定点)名簿/p.159~162)

定点把握対象五類感染症の発生状況を届出る「指定届出機関(定点)」は、インフルエンザ定点、小児科定点、眼科定点、性感染症定点および基幹定点の5種類からなっており、診断した患者数を週又は月単位で報告することになっている。

令和3年12月末の定点数は、インフルエンザ定点69、小児科定点43、眼科定点10、性感染症定点13、基幹定点1である。

行政区別定点数(令和3年12月末現在)

行政区\定点	インフルエンザ	小児科	眼科	性感染症	基幹
北	7	4	1	1	—
上京	5	3	1	1	—
左京	7	4	1	1	—
中京	5	3	2	2	1
東山	3	2	—	1	—
山科	7	5	1	1	—
下京	3	2	—	1	—
南	5	3	—	1	—
右京	8	5	1	1	—
西京	8	5	1	1	—
伏見	11	7	2	2	—
合計	69	43	10	13	1

イ 年間報告数、定点当たり報告数の推移(表-4-1~5-2/p.36~39、図-1~2/p.65)

(ア) インフルエンザ定点

インフルエンザの年間定点当たり報告数は、0.16(11例)であった。インフルエンザについての詳細は、

「(2) イ 令和3年 インフルエンザのまとめ」(p.3)を参照。

(イ) 小児科定点

小児科定点からの10感染症の年間総報告数は13,074例、年間定点当たり報告数304.05で、過去10年間(平成23年から令和2年まで)の定点当たり報告数では、令和2年の次に少なかった。上位5感染症は、感染性胃腸炎、RSウイルス感染症、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎、手足口病、ヘルパンギーナの順となり、小児科定点全体の91.4%を占め、最も多い感染性胃腸炎は、51.3%を占めていた。

また、過去5年間(平成28年から令和2年まで)の平均値(過去5年平均値)より多い感染症は、10感染症中RSウイルス感染症のみで、過去5年平均値の2.29倍であった。

インフルエンザ定点及び小児科定点把握対象感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数の 過去5年平均値との比 ()内は前年比
インフルエンザ	11	0.16	0.00 (0.00)
RSウイルス感染症	2,015	46.86	2.29 (21.21)
咽頭結膜熱	305	7.09	0.48 (1.02)
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1,346	31.30	0.53 (0.68)
感染性胃腸炎	6,712	156.09	0.61 (1.63)
水痘	186	4.33	0.33 (0.55)
手足口病	1,217	3.37	0.57 (8.39)
伝染性紅斑	11	0.26	0.02 (0.08)
突発性発しん	566	13.16	0.75 (0.83)
ヘルパンギーナ	655	15.23	0.81 (4.31)
流行性耳下腺炎	61	1.42	0.12 (1.45)
合計	13,074	304.05	—

(ウ) 眼科定点

眼科定点から急性出血性結膜炎の報告はなかった。流行性角結膜炎の年間総報告数は50例、年間定点当たり報告数5.00、定点当たり報告数の過去5年平均値との比0.29、前年比0.68であった。

眼科定点把握対象感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数と 過去5年平均値との比 ()内は前年比
急性出血性結膜炎	0	0.00	—
流行性角結膜炎	50	5.00	0.29 (0.68)
合計	50	5.00	—

(エ) 性感染症定点

性感染症定点からの4感染症の年間総報告数は401例であり、その内訳は、性器クラミジア感染症224例、性器ヘルペスウイルス感染症104例、尖圭コンジローマ26例、淋菌感染症47例であった。前年比は、性器クラミジア感染症 1.14、性器ヘルペスウイルス感染症 1.13、尖圭コンジローマ 1.24、淋菌感染症0.98であり、性器クラミジア感染症及び性器ヘルペスウイルス感染症、尖圭コンジローマが前年よりも増加した。

性感染症の報告数

感染症名	報告数(例)	定点当たり報告数	定点当たり報告数と 過去5年平均値との比 ()内は前年比
性器クラミジア感染症	224	17.23	0.98 (1.14)
性器ヘルペスウイルス感染症	104	8.00	1.08 (1.08)
尖圭コンジローマ	26	2.00	0.76 (1.24)
淋菌感染症	47	3.62	1.14 (0.98)
合計	401	30.85	—

(オ) 基幹定点

基幹定点対象感染症は8感染症であるが、報告はなかった。

ウ 月別の報告状況 (表-6-1～表-10/p.40～48、図-3/p.66～67)

感染症発生動向調査における令和3年の報告週対応表は、<表-1/p.28>に示すとおりである。また、週単位で報告される感染症の月別集計は、対応表に基づいて行っている。

インフルエンザ定点におけるインフルエンザの月別定点当たり報告数は、1月(0.04)、2月(0.04)、3月(0.03)の順となった。

小児科定点における対象感染症の月別定点当たり報告数は、12月及び11月、5月の順で多かったが、最大でも1箇月あたり3例であった。感染症別報告数の月別1位は<表-10/p.48>に示すとおり、6月及び7月はRSウイルス感染症、その他の全ての月において感染性胃腸炎であった。

眼科定点及び性感染症定点における対象感染症の月別の報告数は、<表-6-2/p.41>に示すとおりである。

エ 年齢階級別の報告状況 (表-11-1～14-2/p.49～56、図-4/p.68、69)

インフルエンザ定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、0～4歳が4例で最も多く、全11例中の27.3%を占めた。

小児科定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、1歳が最も多く25.8%を占め、以下、2歳 18.9%、3歳 10.9%の順であり、4歳以下が総報告数の73.1%を占めた。

小児科定点における年齢階級別の感染症別報告数は、0～5箇月を除く年齢階級で感染性胃腸炎が1位(0～5箇月はRSウイルス感染症が1位)であり、2位は、0～5箇月では感染性胃腸炎、6箇月～11箇月及び1～3歳ではRSウイルス感染症、4歳以上ではA群溶血性レンサ球菌咽頭炎であった。

眼科定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、20～29歳が32.0%と最も高く、次いで、30～39歳が22.0%、70歳以上が16.0%の順であった。

性感染症定点における年間総報告数の年齢階級別割合は、20～24歳が27.9%、25～29歳が19.5%、30～34歳が14.5%の順であった。

オ 行政区別の報告状況

行政区別の報告数、行政区別の定点当たり報告数、感染症別の行政区別割合及び行政区別の感染症別割合は、<表-15-1～18-2/p.57～64>に示すとおりである。